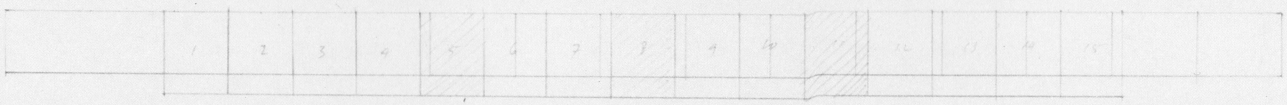
JAN DIBBETS



Daylight - Flashlight

Jan Dibbets 71
Daylight - flashlight
outside light - inside light

ヤン・ディベッツ展

11月15日～11月27日　日曜・祭日休み

ヤン・ディベッツ と「つくられた大地」の伝統

峯村敏明
TOSHIAKI　MINEMURA

ヤン・ディベッツは今日最も国際的な性格の国、オランダの美術家である。その芸術は、1960年代後半の西ヨーロッパという、芸術活動が最も国際化した状況のなかで形成された。実際、彼の仕事のほとんどは、写真、フィルム、ヴィデオなど、国際的にほぼ完全に規格化された手段を用いてなされている。ディベッツの名は、写真による芸術という、過去10数年間にどの工業先進国においても盛んになった現象の入口に、表札のように刻みこまれているといっても言い過ぎではあるまい。

しかし、環境と手段が国際的だということは、一つの真実でしかない。この真実だけで一芸術家の芸術の神髄をも理解することが可能かどうかとなると、話は別であろう。ディベッツの同国人ルディ・フックスは別の観点が必要だと考える一人である。彼は、風土に根ざした芸術とたんなる地方芸術とを区別したうえで、次のように語っている。

「ヤン・ディベッツは風土に根ざした芸術家である。彼はオランダの文化を受け入れてきた。そのなかでこそ、自国語を話すのと同じ自然の気安さで動くことができるからだし、その領域でこそ自己表現をせざるをえないからである。その外では本当の自己表現はできない。このように自在に振舞うことができるのであるから、彼自身の風土的文化はけっして牢獄なのではない。むしろ純粋な自由である。風土的なもののなかの自由だからこそ、彼のつくる映像はかくも完璧に彼の文化とぴったり調和し、一度見たら忘れられないような映像となっているのである。彼の映像は、つくられるより前から、いつもそこにあったように思える。これは真の芸術家である証拠である。偉大な芸術には文化を生き返らせ、ほとんど忘れられていた記憶を甦らせる独特の力がある。ディベッツの芸術の質と意味は、彼と同じ系譜上の友人たち、モンドリアン、ロイスダール、サーンレダムによって担われている。と同時に、彼の芸術は彼ら先輩芸術家たちの質を担っているのである。」

ちなみに、フックス氏は国際的視野の活動で有名なアイントホーフェン市のファン・アッベ美術館の館長である。ことし第七回カッセル・ドクメンタ展の総括コミッショナーでもある。彼の論旨が芸術の国際性を否定するものでないことは断るまでもあるまい。ディベッツの仕事が普遍的な評価に耐えるものであることを認めた上でなお、というより、それを認めればこそ、その普遍性がオランダの文化的風土に根ざした、いわば固有のテリトリーに発した芸術の持ちうる普遍性であることを強調したかったのであろう。私はこのような観点を大切に思う。大切なだけでなく、今日ますます必要な観点であろうと信じる。

もし、文化的風土という観点――場の自己限定、及び限定のなかの自由という考え――を全然持たずにディベッツの芸術を考えねばならないとしたら、はたして私たちは正当な評価を持つことができるだろうか。たとえば、もう一人の同国人E・デ・ウィルデの次のごとき結論は、浅薄に響かずに済むだろうか。

「ディベッツの仕事には内的な一貫性がある。その時期その時期で作品が違うように見えるかも知れないが、彼の念頭にあるのはいつも同じこと、すなわち、目に見える知覚的現実を抽象作用のうちに統合すること、なのだ。光と色、抽象的構造、目に見える知覚的現実がもつ表現的な質、こういった事柄に関心があるということは、たとえ彼が絵具や筆の代りにカラー写真を用いてはいても、ディベッツが真の画家だということを示しているのである。」

これらの指摘はすべて正当にディベッツの芸術の特質を穿っていよう。とはいえ、それらはあまりに絵画芸術一般の特質と重なっているために、ディベッツの芸術を、実体のない抽象的な国際通貨ＳＤＲのごときものに見せてしまいかねない。

だが、本当は、ディベッツの光とはサーンレダムが描いた教会内陣に差し込む光のように無色透明な光、従ってそれ自体がオランダの匂いに満ちた光なのではなかろうか。また、彼の抽象構造とはたんにタブロー形式の上澄みとしてのそれではなく、むしろ、ロイスダールの風景画がオランダの低い水平線をタブローの四角形とを和解させるために編み出した重力のある（大地に方向づけられた）抽象構造に通じるものでもあるのではなかろうか。そうでなければ、カメラのファインダーが与える四角な枠組に従って風景や建築空間をあのように自在かつ抽象的に分節化するディベッツの仕事は、たんなる形式主義的な図形の遊びにしか見えないだろう。そして、フックス氏が言ったような「一度見たら忘れられない特徴のある映像」とはならなかったにちがいない。

矛盾めいた言い方だが、ディッベッツの抽象構造を支えているのは自然である。水平線、太陽光線、透視投照線、水面、窓枠、ブラインドの線、木立ち、カメラのファインダーの四角等に潜在する抽象性が、作品の抽象構造として編成されているのである。そのことは、

1973年ごろから始まった何種類かのStructureシリーズでも共通して言えよう。映像のモンタージュは極度に単純化され、植物の茂みや水面や自動車の車体などの垂直映像がそのまま作品の非イリュージョニスティックな抽象構造となっている。色彩はほとんど自然との結びつきを忘れさせるまでに抽象化され、色彩自体の輝きと喜びをたたえている。とはいえ、これらStructureシリーズでは、どんなに自立した色といえども自然に由来しないものはない。水面であったり草むらであったり車のボデーであったり、いずれもが自然のある局面を潤色せずに直写した結果なのである。

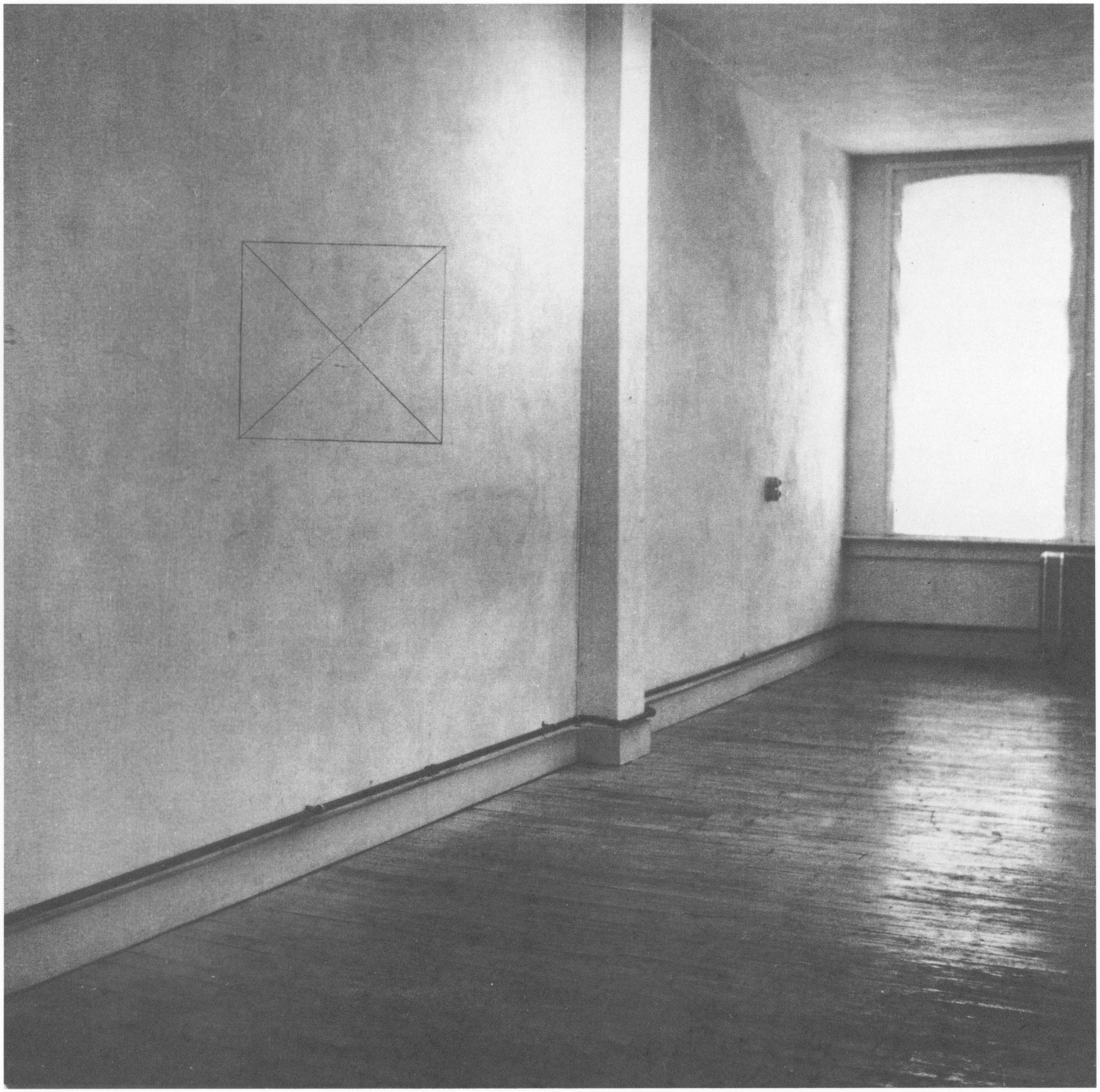
これはディベッツが写真という手段を用いたことの結果なのだろうか。そうではあるまい。事実はむしろ逆であって、彼の中の絵画的欲求、すなわち「目に見える知覚的現実を抽象作用のうちに統合する」という目と心の欲求が、無理なく彼にカメラを持たせることになったというのが真実であろう。そしてその絵画的欲求とは、もう一度繰返すならば、オランダの文化的風土との相互交渉のなかで育った欲求にちがいないのである。

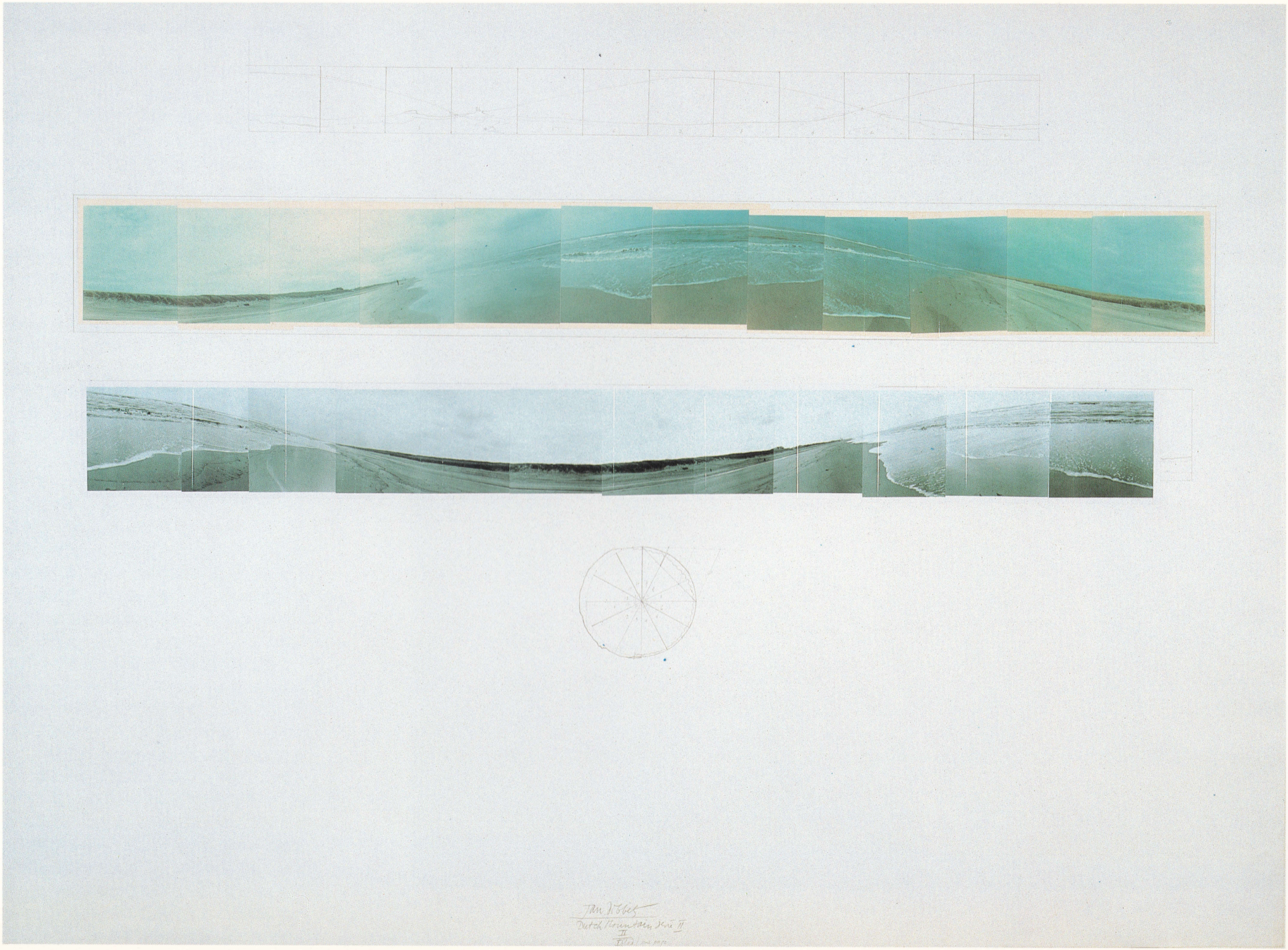
私たちの知っている17世紀のオランダ絵画とは、他のいかなる地域のそれにもまして実証主義的なリアリズムに秀でたものであった。このリアリズムは19世紀末以降の西欧近代絵画のなかで視覚的事実性を重んじる現象学的なリアリズムからさらには絵画の形式に内在する内面的なリアリズムへと転化し、作品自体の抽象構造を明示するものとなっていった。

ディベッツの芸術における自然と抽象との結びつきは、このような背景のなかで理解されるべきものなのではなかろうか。現代絵画の抽象化とイリュージョン追放が行きつくところまで行った果てに出てきた彼の写真による絵画は、しかし、水栽培のもやしみたいな浮草なのではなく、四百年の北欧絵画という「つくられた大地」に根を下ろした芸術だったのである。

そういえば、ディベッツもまたDutch Mountainという「つくられた大地」の創出者であった。

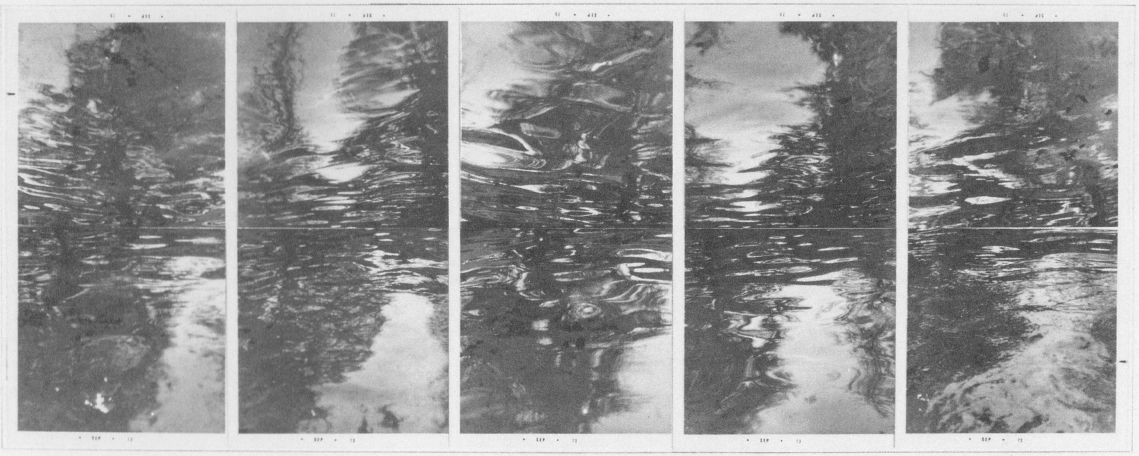
Perspective correction - My studio I, 2: square

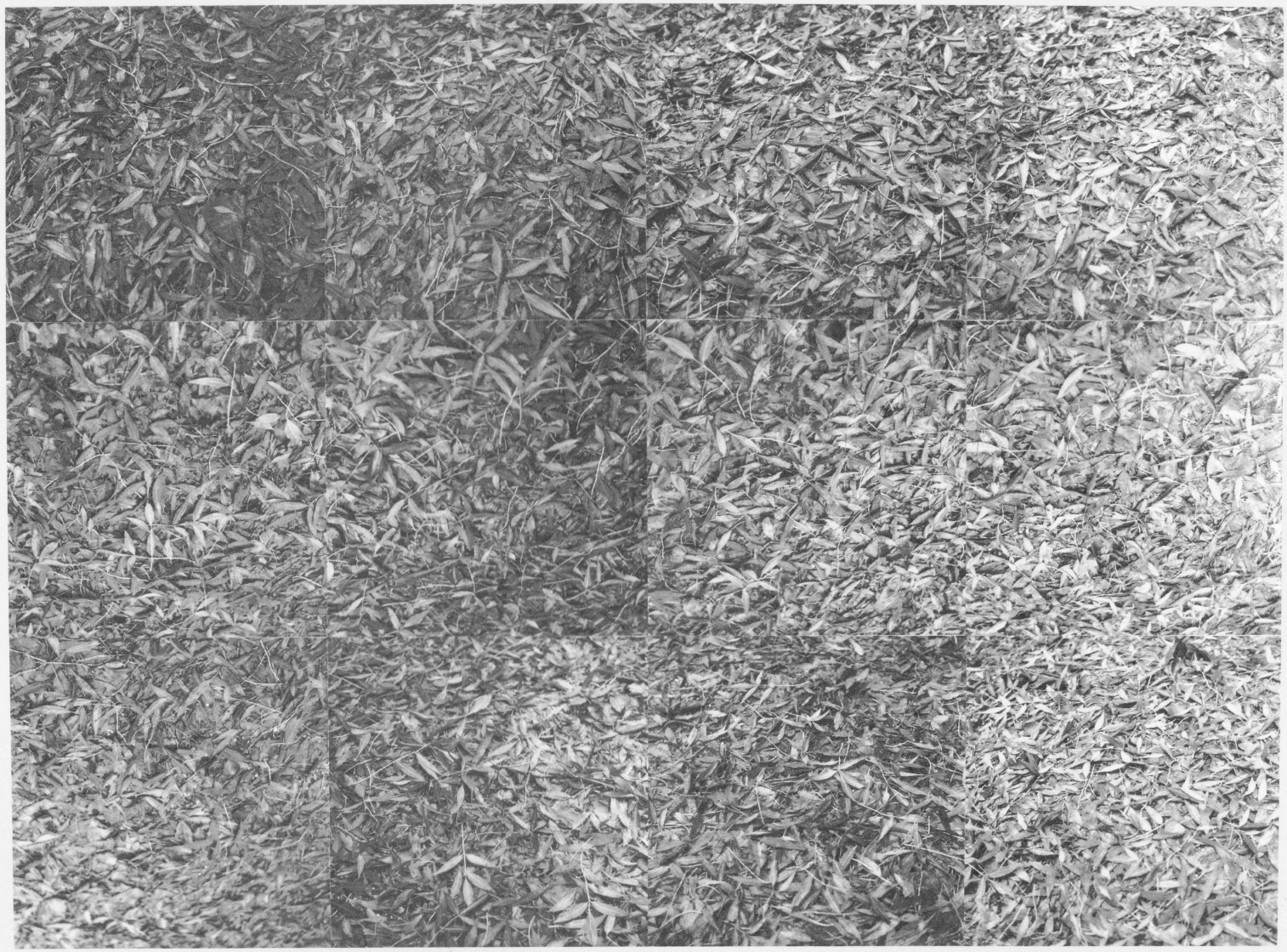




Dutch Mountain/sea, 1971

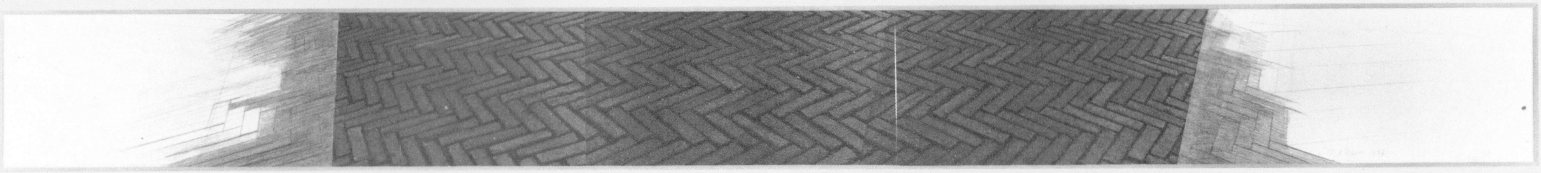
Monet's Dream
1973

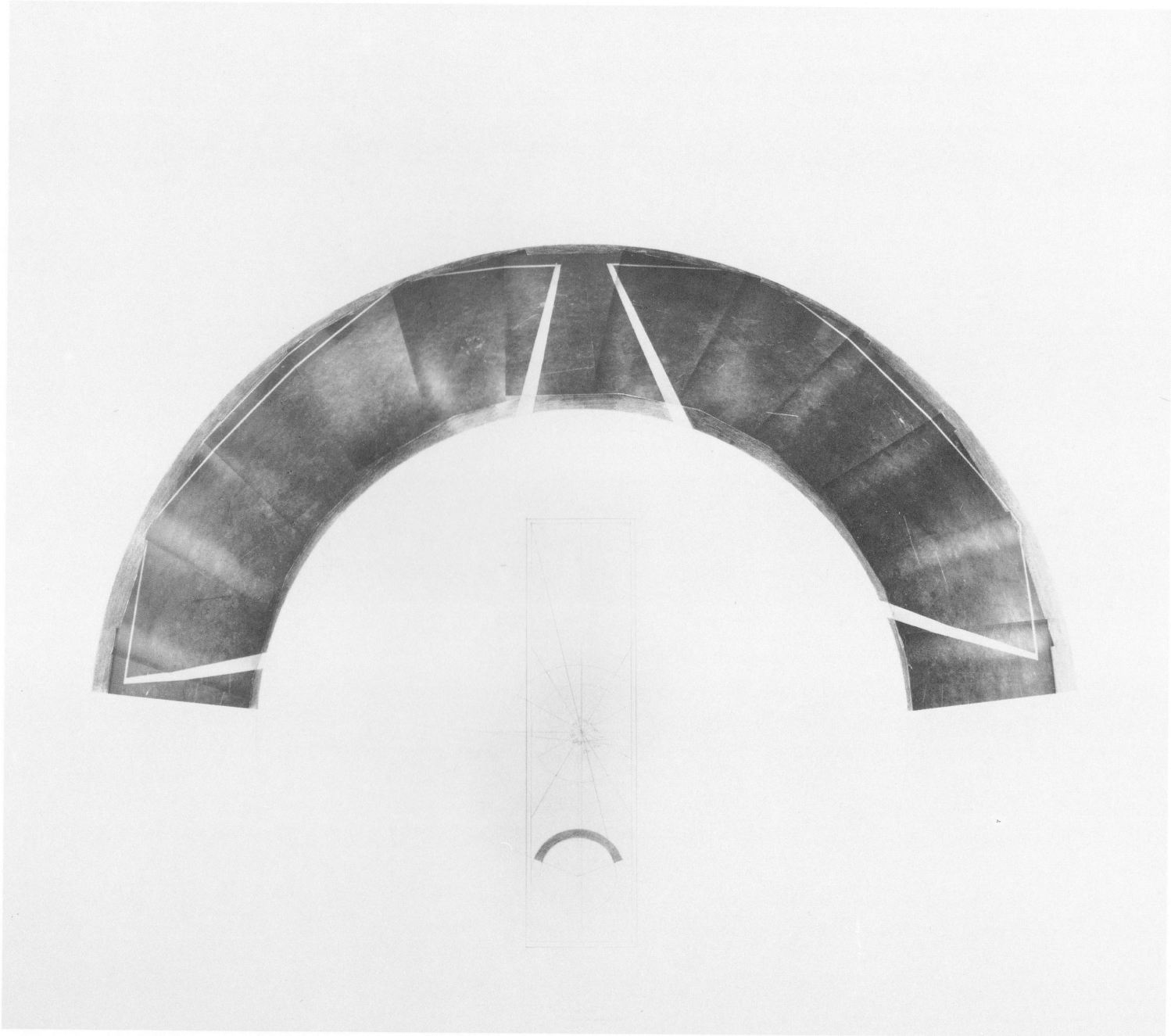




Structure piece leaves, 1974

Black and white structure, 1978





Structure panorama 1978

Waterstructure, 1975

Perspective correction - My studio I, 2: square
with 2 diagonals on wall, 1969
bl/wh photograph on photographic canvas
115 x 115
Private collection

Dutch Mountain/sea, 1971
col., bl/wh photographs and pencil on paper
74 x 100
coll. Bianka Dibbets, Amsterdam

Daylight - Flashlight
outside light - inside light, 1971
col. photographs and pencil on paper
50 x 65
Private collection

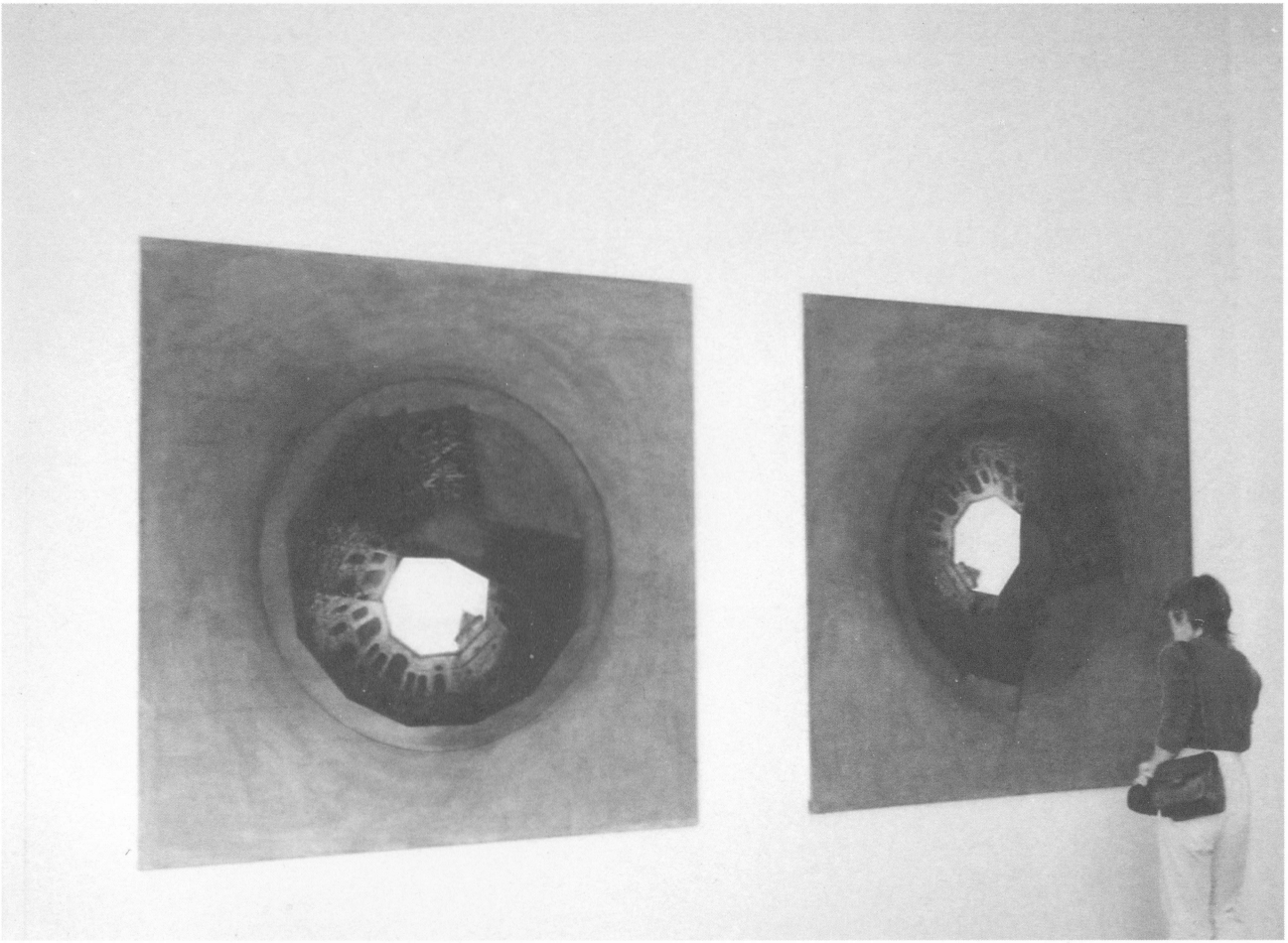
Monet's Dream
1973
col. photographs on paper
50 x 65
Private collection

Structure piece leaves, 1974
col. photographs and pencil on paper
80 x 96
Private collection

Waterstructure, 1975
col. photographs on paper
73 x 102
coll. Gian Enzo Sperone, Rome

Structure panorama 1978
bl/wh photographs and pencil on paper
mounted on polystyrene board
86 x 89
Private collection

Black and white structure, 1978
bl/wh photographs and pencil on paper
80 x 110
Private collection



Selected individual exhibitions

1967	Galerie Swart Amsterdam
1968	Konrad Fischer Dusseldorf
1969	Exhibition by mail. Seth Siegelaub New York
	TV as fireplace, Fernsehgalerie Gerry Schum/ Westdeutsches Fernsehen
1969/1970	Audio-visuelle Dokumentationen Museum Haus Lange Krefeld
1970	Gegenverkehr, Zentrum fur aktuelle Kunst Aachen
	Galerie Yvon Lambert Paris
	Galerie Françoise Lambert Milan
1971	Galleria Sperone Turin
	Bykert Gallery New York
	Konrad Fischer Dusseldorf
	Art and Project Amsterdam
1971/1972	Stedelijk Van Abbemuseum Eindhoven
	Galerie MTL Brussels
1972	Galerie Yvon Lambert Paris
	Jack Wendler Gallery London
	Israel Museum Jerusalem
	36th Venice Biennale dutch pavillion
1972/1973	Stedelijk Museum Amsterdam
1973	Leo Castelli Gallery New York
	Konrad Fischer Düsseldorf
	Jack Wendler Gallery London
1974	Galleria Sperone Turin
	Konrad Fischer Düsseldorf
	Galerie Rolf Preisig Basel
	Galerie Yvon Lambert Paris
1975	Galerie MTL Brussels
	Art and Project Amsterdam
	Cusack Gallery Houston
	Claire Copley Gallery Los Angeles
	Galleria Marilena Bonomo Bari
	Leo Castelli Gallery New York
	Kunstmuseum Lucerne
1976	Scottish Arts Council Edinburgh
	Arnolfini Gallery Bristol
	Konrad Fischer Düsseldorf
1977	Unit Gallery Chapter Arts Centre Cardiff
	Museum of Modern Art Oxford
1978	Leo Castelli Gallery New York
	Galerie Charles Kriwin Brussels
1979	INK Zürich

Selected bibliography on the artist

Articles

Ammann, Jean-Christophe — Perspective Corrections. *Art International*, May, 1969

Blotkamp, Carel — Notities over het werk van Jan Dibbets, *Museumjournaal*, 3, 1971

Boice, Bruce — Jan Dibbets: The photograph and the photographed, *Artforum*, April, 1973

Fuchs, R.H — Over Jan Dibbets. *De Gids*, 2, 1971

Modes of visual experience: new works by Jan Dibbets, *Studio International*, January, 1973

Jan Dibbets, *Art Monthly*, 3, 1976/1977

Graevenitz, Antje von — The art of discovering conflicts in perception, *Data*, summer, 1973

Lebeer, Irmeline — Jan Dibbets, *Chroniques de L'Art Vivant*, 31, 1972

Reise, Barbara — Jan Dibbets: A perspective correction, *Artnews*, summer, 1972

Notes [1] on Jan Dibbets [2] contemporary [3] nature [4] of realistic [5] classicism [6] in the Dutch [7] tradition, *Studio International*, June, 1972

Tuyl, Gijs van — Het werk van Jan Dibbets op de Biënnale van Venetië, *Museumjournaal*, 4, 1972

Vos, Marcel — Some work of Jan Dibbets, *Flash Art*, 38, 1973

Catalogues

Amsterdam Stedelijk Museum, 1972
Jan Dibbets. Texts by E. de Wilde, Rini Dippel, Marcel Vos

Edinburgh Scottish Arts Council Gallery, 1970
Jan Dibbets. Texts by Barbara Reise and M.M.M. Vos

Eindhoven Van Abbemuseum, 1971
Jan Dibbets. Texts by R.H. Fuchs and J. Leering

Krefeld Museum Haus Lange, 1969
Jan Dibbets, Audio-visuelle Dokumentationen. Text by Paul Wember

Lucerne Kunstmuseum, 1975
Jan Dibbets, Autumn Melody. Text by Jean-Christophe Ammann

Venice 36th Biennale
Edition of CRM, Rijswijk, 1972. Text by R.H. Fuchs

Further information can be found in the catalogues of:

Eight contemporary artists
The Museum of Modern Art New York, 1974

Europe in the seventies: aspects of recent art
The Art Institute of Chicago, Chicago, 1977

European dialogue: the Third Biennale of Sydney
The Art Gallery of New South Wales, Sydney, 1979

ヤン・ディベッツ展カタログ
発行日　1982年11月15日
発行者　中村路子
製　作　鎌倉画廊

鎌倉画廊 コンテンポラリーアート
中央区銀座7－10－8 平方ビル1F
TEL. 03－574－8307

Kamakura Gallery
7-10-8 Ginza, Chuo-ku, Tokyo Tel. 03-574-8307